

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別裁承認誌第百一七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十八年十一月一日発行(第四百九巻第十一号)

ホトトギス

十一月号



俳句随想 〔二百九十三〕

汀子

ホトトギス新歳時記を出している三省堂に次のような質問があったと連絡があった。

一、青葉の例句「詣西大寺、青葉して御目の雫拭はばや 芭蕉」について「青葉」は「若葉」の誤りではないか、又、「西大寺」は「唐招提寺」の誤りではないか。

質問に順にお答えしたい。青葉の句については、『笈の小文』に「招提寺鑑真和尚来朝の時、船中七十余度の難をしのぎたまひ、御目のうち塩風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拝して」とあり、元禄元年四月唐招提寺に詣での吟であることは間違いない。従つてホトトギス新歳時記の「西大寺」は「唐招提寺」に直さなければならぬ。しかし例句となると頭を悩ます問題である。『笈の小文』には〈若葉して御めの雫ぬぐはばや〉とあるが、支考の『笈日記』には〈青葉して御目の雫拭はばや〉とあるからである。芭蕉の弟子である支考の誤りと単純に決めてよいものだろうか。一句をよく鑑賞し、吟味しなければならぬであろう。一方『ホトトギス新歳時記』は虚子編『新歳時記』の例句を踏襲しており虚子編『新歳時記』でも「若葉」でなく「青葉」となっているのである。この理由も考えて見なければならぬ。

旬日記 汀子

平成十七年十一月三日 関西野分会

いつも日の当る枝あり帰り花
大綱と気づきたるより目を高く
火星見に夜長の家居染しまむ
雨風に耐ふる力よ帰り花
十一月三日 下萌旬会

本復のこの日待ちたる文化の日
の丸を掲げてせめて文化の日
華やきも末枯もみな庭のもの
十一月七日 ロイヤル吟行会

そぞろ来てホテルのロビー冬に入る
立冬と聞けば川風ビルの風
行秋の昨日盛会なりしさと
立冬やこれよりどつと逃ぐる日々
快晴を呼ぶ雨一と日冬に入る
十一月八日 大阪倶楽部

籬ゆるみたるやはじまる庭落葉
初霜に快晴の朝はじまりぬ
大根の夕餉の匂ひ旅帰り
立冬の午後は忘るる日和かな
落葉踏む音にとどまる心なく
峰落葉奈落の待つてをりにけり
一夜にて尽せしごとく散紅葉
旅先の雨のち晴るる鷹の空
紅葉散りそめて天地のゆるみけり
紅葉谿とは散り尽すまでのこと
十一月九日 たつの市民俳句大会

古き世を語る露けき坂の町
下らねば小春の磴を登り来て
十一月十日 清交社

冬耕の一人が二人三人に
冬ぬくし昨日と同じやうな朝
南天の実とは誰もか知つてをり
山茶花の咲きはじめたる家居かな

つぎはぎの稿仕上りぬ冬ぬくし
海見えて又曲る路地冬ぬくし
せめて冬暖かかりし又旅へ
十一月十一日 工業倶楽部

心して初冬の朝の旅仕度
初冬といふこれよりの日々思ふ
日帰りの旅を重ねて初冬かな
二日ほど晴れては雨に神の旅
十一月十二日 樟田中暖流様

ふたゝびをお目に掛れぬ寒さかな
霜深き地の悲しみの中にいま
吹きだまりあり散紅葉散黄葉
十一月十五日 有恒俳句会

蓮根掘る泥の全身にも及ぶ
旅心初冬の風の荒れしとも
ふと背中無防備なりし冬に入る
初霜の深き山路にさしかかる
十一月十五日 無名会

神渡旅路の歸路の罫船となる
フエンス越し隣石路も咲きにけり
たちまちに旅路彩る石路の花
仕事なほ増ゆるばかりや冬に入る
今日一日籠りて仕事神渡
旅ごころつなぐ家居の石路の花
十一月十六日 夏潮旬会

家居して時雨ありしと聞くばかり
これよりは落葉尽くすを待つばかり
花八傘木洩日集めをりにけり
時雨傘たたため乾きをりにけり
時雨来と少し仰ぎしほどのこと
十一月十七日 「俳句」依頼を受け

書紙に書きて家族の揃ひけり
初髪を先づととのへてよりのこと
未知ゆ糸に期待も少し初暦
かしこみて初富士俯瞰してをりぬ
風音をさへぎる玻璃や初明り

星消えて年改りゆきにけり
十一月十七日祝「旭川」七言
旭川の歴史もとく小春かな
十一月二十三日 「俳句研究」

マロニエの黄葉の散つてをりし音
探しものよりははじまりし冬構
風音の消えし庭より初明り
星消えて又星消えて初明り
乾坤の縦横斜め初明り

好きなこと又あと回し去年今年
新年の風音と聞きとめてをり
構想のふくらみ年の改る
初夢に本音の少しありしこと
手足より覚めて初夢なりしこと
十一月二十四日 きささぎ会

紅葉散り尽すの間あり掃かでおく
晴れてみて空のどこかに初時雨
木の呪縛解きはじめし散紅葉
逗留の長くなりたる初時雨
十一月二十五日 時雨会

大根の煮る匂ひより家路かな
見せられし熊手の仔細聞きながら
お祝儀をばづめば熊手小さくとも
大根を煮る名人といへる自負
十一月二十六日 旬会と講演の会

まつ浅き眠りに入りて山眠る
山眠り海へ展けてゆける街
滞在や白菜使ひ切ることに
十一月二十七日 野分会

日だまりと限らぬ場所に戻り花
体調をととのへて冬乗り切らん
今日も晴大綱の飛ぶ日和かな
俳句王国 「冬芽」寒さ
古傷の存在告ぐる寒さかな
木々まとふもの地に返し冬芽かな
狭き庭更に華やぐ落葉かな
火星見て冬の星座を仰ぎけり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十七年十二月一日 一水会

刈田もう命宿してをりにけり
毒茸といふ華やぎでありにけり

十一月八日 刈谷市民俳句大会

立冬の昨夜は三河に心馳せ
棉吹いて机上に生氣放ちけり

十一月十日 土筆会

時雨るるや湖北は歴史秘めしまま
銀に柀の花日を弾き

西の賀に時雨彩るものとして

熊手買ふ声の躍つてをりにけり
十一月十一日 「旭川」七百号祝句

師走てふ節目七百てふ節目
十一月十三日 囲む会

冬蝶に縛るる力ありにけり
神の留守守りて虚子句碑鎮もれり
千年の杉小春日を受け止めて
句碑の文字冬日なぞつてゆきにけり

その中の平安の世を知る冬木
輪郭を空に放ちて冬桜
昼火事を収め正午の時報かな
七五三くづれ芝生に転がれり

十一月十四日 朝日カルチャー若草句会

鏡湖の水面騒がず片時雨
七五三母が眠たくなつてをり
磴登る袴著母が気にしつ

十一月十五日 草木瓜会

時雨るるや余呉に明るさ移しつ
枯葉散る五番街てふ静寂かな
小春日を弾き返してビルの黙

十一月十五日 草木瓜会

虚子父を恋ひし小春に我もまた
一枚の枯葉に枝の生氣かな
十一月十六日 登高会

花八手どうして人は宇宙恋ふ
初時雨余呉は歳月くり返し
芭蕉忌や笑止魂一行詩

十一月十七日 蕉心会

冬めいてきても下町は下町
大川の水と冬日の対話かな
船往き来して水鳥の乱れなく
てらてらと卑弥呼冬日を弾き航く

小春日といふ水の黙ありにけり
蔦紅葉日を吸ふ角度ありにけり
外つ国の新酒に早も心馳せ
芭蕉はんあんだの忌日来てまつせ
都鳥気をつけ休め回れ右

十一月十九日 日本伝統俳句協会関東支部埼玉臨盆行会

一茶忌の空雀等を零しけり
一山の黙冬紅葉冬黄葉
小春日の地蔵やあつち向いてほい

十一月二十日 若水会

銀杏散る天与の風に光りつつ
大根を十一本の手が洗ふ
時雨るるや浪速は涙雨として

十一月二十日 若水会

夕時雨湖北の神話繙かれ
小夜時雨君が瞳を濡らすとき
十一月十四日 目黒学園句会

小六月稜線丸くをさめけり
小六月猫に欠伸をうつされし
道迷ふことも小春の路地なれば

十一月二十六日 ホトトギス社句会

幾千のたましひをさめ山眠る

雑詠

廣太郎 選

万といふ彩の輝き 四葩園 たつの 浅井青陽子
 籐寝椅子ちらと舟屋の雨の路地 同
 黒南風の舟屋の路地を還しけり 同
 まだ仮設暮しは解けず蚊喰鳥 長岡 安原 葉
 被災地の勿忘草に偲ぶ人 同
 草取もその人らしく大雑把 同
 庭青葉小波となり寄するかに 姫路 桑田青虎
 静寂にさ庭の青葉みなざりし 同
 わが庵の式部の花をたなごころ 同
 かくも来し古き宮居の藤見んと 福岡 松尾緑富
 神橋の藤棚仰ぎつゝ渡る 同
 境内の四方に広がる藤棚を 同
 舟屋出入りす潮の香と緑の香 神戸 山田弘子
 一戸づつ五月闇抱く舟屋かな 同
 六甲の闇を分けゆく蚩狩 同
 惜春の情落ちこめる火口かな 福山 竹下陶子
 日は薔薇を優しくも淋しくもする 同
 梅雨といふ天に隙間のなかりけり 同

一川をのぼる軽鳧の子物語 大阪 葛三郎
 糸とんぼとは藻の国のへりコプター 同
 時間去り時間あらはるまで昼寝 同
 今朝咲いて蜜柑の花の山となる 熱海 嶋田一步
 紫陽花の香のなき彩の咲きはじむ 同
 日本は北半球よ薔薇の咲く 同
 吾が庭に割合長居七変化 同
 蜻蛉の空いま緋模様なる 同
 嶋田摩耶子
 ごきぶりの死ぬふりをする恐ろしき 同
 花菖蒲神代の色を今になほ 東京 川口利夫
 万緑の裾に舟屋の暮しあり 同
 更衣せし身軽さのひとり旅 同
 毘沙門に祈る連覇や虎の夏 同
 大久保白村
 阪神の帽子で神田祭の子 同
 梅雨もまた楽し首位盗りタイガース 同
 墓裏の藪蚊大きく刺しにくる 同
 坊城俊樹
 都府楼の古よりの夏の蝶 同
 掛軸の虚子句と共に端居かな 同
 滝落つる天に怒りのあるごとく 熊本 岩岡中正
 首のあたりにはじまつてゐたる梅雨 同
 いそしめば心みどりになつてゆく 同
 夏霧や対向列車つひに来し 檀原 稲岡 長
 往還に跳ね返りゐる夕立かな 同
 祇園会の熱気と湿気京都駅 同

雑詠句評（十月号より）

いつ来てもこの藤椅子が待つてをり 大分 篠原樹風

「藤椅子」は藤の茎などを編んで作ったもので、夏の涼を呼ぶ家具の一つである。かつての和風の家屋では家具や建具などを入れ替えて夏を迎えたものである。とりわけ藤椅子にはそこに寛ぐ人の座り癖や古疵の跡などが残っていて回顧の心を呼び、親しみを覚えさせる。

掲句は、「この」と藤椅子を限定し、作者は特別の思いを寄せている。「藤椅子が待つてをり」と擬人法を用いて主体を藤椅子に置いているところにも注目したい。「この」「あの」「その」などは次に続く名詞を限定するとともに、意味を強める働きをする。掲句の背景はやや伝わりにくいだが、いつ来ても自分を待つてくれている藤椅子を浮かび上がらせ、それに寄せる作者の気持ち素直に伝わってくるようだ。（弘子）

避暑で毎年行かれている場所なのかも知れない。長年使い古した馴染みある「藤椅子」に今年も出会い、ゆつたりと座っておられるのであろう。何か懐かしい人との出合いのようにも見て取れる。「藤椅子が待つてをり」という表現が、まるで季節が親しい友人であるような仄々とした感じである。（廣太郎）

一斉にめくる楽譜や春灯下 札幌 高橋笛美

雅 弘子・昭代
比奈夫・暮潮・純也
小木菟・基子・仁義
一歩・廣太郎

春の夜の音楽会。タクトに集まっていた目が一瞬逸れると、楽譜の方に手が伸びる。申し合わせたように、一斉に頁をめくる。すると、この一瞬に聴衆の意識が壇上集まる。又、元の姿勢、元の視線に戻り、演奏が続く。春灯の華やかな下故に、優雅なひと時を楽しみ、うっとり聞きほれている聴衆の姿がうっすらと会場に浮かび上がるようである。（雅）

オーケストラの演奏風景であろう。全員が一斉、という事はないが各パート、たとえば第一ヴァイオリンを見てみると、譜面を曲の途中でタイミング良く一斉にめくる。厳密には二人で一つの楽譜を見ているが、その姿も一種の手練に見える。交響曲が聞こえてくるようだ。（廣太郎）

天地有情

江戸選

逝かしめしは吾が鈍にあり沙羅落花
 空虚とはとめどなきもの夏夕べ
 麴を鼻から吹いて咳込みぬ
 一粒を零すやどつと山夕立
 聖書読むべし緑蔭は憩ふべし
 麦熟るるすなはち大地熟るるなり
 水車置き箱庭つまらなくなりぬ
 八角は角とれ易く登山杖
 昭和てふ時代顧み梅雨冥し
 水の如き師の俳懐の涼しさよ
 旅人の声舟虫を散らしたる
 花椎の香に旅疲れありにけり
 父の日の花束届く娘の遠く
 大江山越えて丹後の植田風
 那智の滝わがこころざしみそなはせ
 虚子の声聞きし目覚めや露涼し
 草笛のテノールは僕アルト君
 草笛の名人たりて大指揮者

吹田 大橋 暁
 同 同 同
 樞原 稲岡 長
 同 同 同
 熊本 岩岡 中正
 同 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同 同
 豊中 瀧 青佳
 同 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同 同
 たつの 浅井青陽子
 同 同 同
 神戸 長山あや
 同 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同 同

明易の風入れてより一寝入り
 六甲の一步を鎖す夏の霧
 花合歓に開放されし二階かな
 夏至過ぎしみ空にタワー峙てり
 御僧の風と召さるる夏衣
 あぢさぬを挿し紫の墓となる
 藤棚を見つゝ押し来る車椅子
 夜は夜の藤見の客のかく絶えず
 紫陽花やまた富士見える道となる
 田草取りをりしが富士に立ち上がる
 窓に來し火蛾の辛抱つづきをり
 高々と不意打ちの朱や凌霄花
 阪口楼その名とどめし浮葉かな
 茶白山梅雨の晴間となる遠出
 哀しくて金魚掬ひの輪に入りぬ
 白黒のテレビを消して金魚の夜
 風の中ひとかたまりの白遍路
 白き風白き遍路となりて去る

吹田 宮崎 正
 同 同 同
 長岡 安原 葉
 同 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同 同
 福岡 松尾緑富
 同 同 同
 熱海 嶋田一步
 同 同 同
 同 嶋田摩耶子
 同 同 同
 姫路 桑田青虎
 同 同 同
 東京 坊城俊樹
 同 同 同
 相模原 木村享史
 同 同 同

天地有情句評

汀子

昭和てふ時代顧み梅雨冥し 豊中 瀧 青佳

激動の昭和と平和を取り戻した昭和の時代を梅雨という季節が

逝かしめしは吾が鈍にあり沙羅落花 吹田 大橋 晁

語る。

自分が早く気付いていればとくやみ沙羅の純白の落花を惜む作

旅人の声舟虫を散らしたる 神戸 山田弘子

者の慟哭。

舟虫を散らしたのは旅人の声と興味。

麴を鼻から吹いて咳込みぬ 榎原 稲岡 長

父の日の花束届く娘の遠く たつの 浅井青陽子

麴が口も鼻もなく咳き込む作者の戸惑い。麴ならではの状態。

遠くに住む娘を思う作者の父の日の感慨。

麦熟るるすなはち大地熟るるなり 熊本 岩岡中正

那智の滝わがころざしみそなはせ 神戸 長山あや

一面の麦秋を熟れた大地と見た作者の感性。

自然を大切にしたいという志を持って那智の滝に対する作者。

水車置き箱庭つまらなくなりぬ 神戸 後藤比奈夫

草笛のテノールは僕アルト君 東京 稲畑廣太郎

土をいれてミニ庭園などを横して楽しむ箱庭への作者の興味。

草笛という鄙びたものにも音楽としての感性を持つ作者。